



回想の太宰治

津島美知子

人文書院

回想の太宰治

昭和五十三年五月二十日第一刷発行
昭和五十三年六月十三日第五刷発行

著 者 津島美知子

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉

郵便番号 六〇〇

電話 〇七五―三五―一三三九

振替京都 一一〇三

印刷 河北印刷株式会社

製本 坂井製本所

© 1978 Michiko Tsushima
Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえしせず
0095-000078-3266

定価 980円

回想の太宰治
目次

I

御坂峠

寿館

御崎町

三鷹

疎開前後

II

書斎

初めて金木に行ったとき

白湯と梅干

千代田村ほか

9

16

19

26

36

59

71

83

97

津軽言葉

119

税金

126

アヤマの帯

138

点描

151

書簡雑感

163

自画像

170

遺品

174

百日紅

182

Ⅲ

『女生徒』のこと

189

『右大臣実朝』と『鶴岡』

196

『新釈諸国噺』の原典

202

『惜別』ノート

205

『パンドラの匣』と木村さんの日記

210

Ⅳ

『奥の奥』

215

旧稿

219

『秋風記』のこと

227

「創作年表」のこと

235

あとがき

回想の太宰治

御坂峠

太宰治は、茶店備え付けの荒い棒縞のどてらに角帯を締めて坐り、五歳くらいの男の子が、その膝に上がったたり下りたりしていた。

前に、甲府の私の実家で会ったときよりも彼は若々しく、寛いでみえたが、先刻バスをおりたとき私を迎えた、茶店のしっかり者らしい三十過ぎのおかみさんと、大柄の妹さんと、ふたりの同性の眼が、二階の座敷に上がってから私には気にかかり、モトヒコという、彼にまつわりついて甘えている子のことともじやまに思われた。

ひっきりなしに煙草をすいながら太宰は、先日までここに滞在していらしたI先生ご夫妻のこと、この茶店の主人は応召中であること、小さい女の子がいて、「タダイさん」と彼をよぶこと、それからいま書いている小説の女主人公の姓「高野」は、茶店の妹さんの名「たかの」さんからとってつけたことなどを明るい調子で話した。

御坂トンネルの大きな暗い口のすぐわきに、街道に面して、この天下茶屋は建っている。茶

店といっても、かなり広い二階家で、階下には型通りテーブルや腰掛を配置し、土産物やキャラメル、サイダーなどを並べ、二階は宿泊できるようになっていた。

御坂トンネルが穿たれて甲府盆地と富士山麓を直結する新道八号線が開通したのが昭和五年頃で、河口湖畔のTさんがこの茶店を建てたのもその頃のことであろう。甲府盆地では御坂山脈に遮られて富士は頂上に近い一部しか見えない。盆地からバスで登ってきてトンネルを抜けると、いきなり富士の全容と、その裾に広がる河口湖とが視野にとびこんで「天下の絶景」ということになる。トンネルの口の高いところに「天下第一」と彫りこまれている。

茶店の背後には山が迫り、その山側の床の間の袋棚の戸が少し開いていて、淡茶色の鞆が見えて、私はほっとした。というのは彼が「無一物」だと言っていたから、それでも鞆くらいは持っているのかとなんとなく嬉しく感じたのだが、鞆はそのとき見えたきりで、その後全く消えてしまったから借り物だったのだ。

彼が荻窪の下宿をひき払って甲州に出発してからその日までに、一カ月ほど経っていた。これもあとで知ったのだが、彼は『姥捨』の原稿料で質屋の蔵に入っていた、夏の和服一揃を出して着かざり、その鞆一つを提げて御坂峠の天下茶屋に登ってきたのである。I先生が太宰を励まして新しい出発を決意させてくださったのであることは言うまでもない。下宿での毎日がよくない。東京を離れて山中に籠って、長篇にとりくんでみるようにと、この茶店を紹介してくださり、書き上げたら竹村書房から上梓してもらう内諾も、とってくださっていた。

大きな課題を負い、師を頼って御坂にきた太宰は、先生のご帰京後は一人ぼっちでこの二階

に残された。

これまで下宿鎌滝では、いつも周囲に誰かがいた。同年輩の独身ものが集まっていた、I家での、翌年一月の結婚式の席上で北さんは、その方たちのことを「有象無象」と、大変失礼な呼び方で呼んで、その有象無象のために始終、客膳をとり寄せ、鎌滝の女主人まで憤慨しているほどで、仕事は妨げられ、郷里から送った衣類寝具など、自他の区別なく、勝手に、その有象無象が質入れしてしまうと、何度も繰り返して、太宰が一方的に被害者であることを力説した。けれども、のちにその仲間のうちで一番年少で、まだ在学中だった長尾良さんから、太宰さんが御坂へ行つて結婚してくれたので、おかげで自分は大学を卒業できました、と感謝されたことから推測すると、何も彼もお互いさまだったのだと思う。

ともあれそのような生活から、一転、山中の一軒家にとり残されて、さびしがりやの太宰は、さぞかし耐え難い思いであつたろう。けれどもずっとこの茶店の二階に籠りきりでいたわけではなく、郵便物の投函や受取を口実に、茶店の前からバスで河口湖や吉田の町へ、又は反対にトンネルをくぐつて甲府市街へおりたことも度々あつた様子である。

御坂の茶屋に太宰を訪ねた秋の一日から、三カ月ほど前まで私は太宰治の名も作品も知らなかった。昭和十年第一回の芥川賞の『蒼氓』は読み、次席の高見、衣巻氏らの名は知っていたのに、太宰治の名は全く盲点に入っていた。

当時、太宰はごく少数ではあるが、熱烈な愛読者と、支持者を持っていたが、知名度ともなればいたって低いものであった。芥川賞候補に挙げられて以後二、三年の沈滞期がなかったら、

もつと文名が上がっていったろう。そして相当ひどい評判や噂が彼を囲んでいたらしいが、私は知らなかったし、この縁談を伝え聞いて某社に勤めている親戚のものから、私の母に忠告があったことを聞いたが、それほど気にならなかった。かぞえ年で二十七歳にもなっていないが深い考えもなく、会わぬさきからだ彼の天分に眩惑されていたのである。

太宰という作家を知るきっかけとなったのは、I先生から斎藤氏に宛てた一通の封書で、毛筆の小さい楷書で「甲府市堅町九十三番地、斎藤文二郎様」と宛名を記した細身の封筒は、その前後、長い間、私の実家の茶の間の状差に差してあった。母がなんという能筆な方だろう、と嘆声を洩らしたのを覚えている。

巻紙に相手の年齢について、十九歳から二十九歳まで（太宰がそのとき三十歳、年齢はすべて数え年）と制限し、太宰については既に何冊か小説集を上梓していること、近々刊行予定のものもあることなどが書かれていた。

I先生に太宰のための嫁探しを懇願したのは、北、中畑両氏である。

I先生と同郷で愛弟子の高田英之助氏が新聞社の甲府支局に在勤中、斎藤家のご長女須美子さんと知り合い、婚約中の間柄で、I先生は高田氏を通して近づきになった斎藤氏に書面を送って、一件を依頼された。斎藤家では、愛婿となるべき人の、敬愛してやまぬ先輩からの依頼とあって周囲を物色し、この書面を私の母のもとに持参し、紹介の労をとってくださったのである。

斎藤夫人がI先生と太宰とを、水門町の私の実家に案内してくださった九月十八日、甲府盆

地の残暑は大変きびしかった。I先生は登山服姿で、和服の太宰はハンカチで顔を拭いてばかりいた。黒っぽいひとえに夏羽織をはおり、あとでわかったのだが、両方とも風を通さない交織もので、白メリンスの長襦袢まで重ねていたのだから暑かった筈である。私はデジンのワンピースで、服装の点でまことにちぐはぐな会合であった。

縁先に青葡萄の房が垂れ下り、床の間には放庵の西湖の富士と短歌数首の賛の軸が懸かっていた。太宰は御坂の天下茶屋で毎日いやというほど富士と向かい合い、ここでまた富士の軸や写真に囲まれたわけである。

それから後、この話は順調に進んだのであるが、当時の彼の書簡でみると、太宰はひとり、天下茶屋でいろいろ気をもみ、取越苦勞をしていたらしい。性格と育ちとから、初めての土地で、初めて知った家庭の素人の女性を相手に自分で交渉することなど何よりの苦手であったと思う。太宰は生家に自分を認めさせたく、それが彼の仕事への推進力にもなっている。その一方、何かというと生家を当てにして援助を求める。郷里の家では、もはや太宰になんの期待ももたず、話に乗らず、相手にせず、飢えさせないだけの仕送りをして、それが適当な処遇と考えていた。太宰が過去どれだけ生家の体面を汚し、母を泣かせたか考えれば当然であるのに――。私の実家に対しての見栄もあり、苦労性の彼はさまざま思い乱れていた様子であるが、周囲の好意――それは多かれ少なかれ彼の天分を認めての上で――によって、婚約披露も結納も滞りなく行なわれた。

十一月六日、叔母ふたりを招き、ささやかな婚約披露の宴が私の実家で催された。東京から

はI先生がわざわざ臨席してください、文学や画の好きな義兄Yが洋酒をもたらし、祝つてくれた。床の間に朱塗りの角樽が一对並んでいたが、斎藤夫人が口にされる「酒入れ」という言葉は、母も私も初めて聞いた。結納は太宰から二十円受けて半金返した。太宰はこれが結納の慣例ということを知らず、十円返してもらえんことを知って大変喜んだ。

この頃までに、私は太宰の作品集二つと、その頃雑誌に発表した短篇を読んだ。八月はじめ、私は東北から北海道への旅行に出て、十和田湖からバスで青森市に出て、連絡船の出航を待つ間、駅前通りの成田書店に入って、棚に、母から聞いた人の著書『虚構の彷徨』が三冊ほど並んでいるのを発見し、連絡船の中で読んだ。「一九三八・八・七 青森にて」と書き入れたこの本が今、残っている。

『晩年』は秋になって太宰が砂子屋書房に頼んで送ってくれた。『満願』の載った『文筆』が同封されていた。そのころ『新潮』で『姥捨』を読んだ。こんなに自分のことばかり書いて——プロメテウスの生肝を啄むのは驚だというけれど、この人は自分で自分を啄んでいるようだ——そんなことを感じた。(のちに三鷹で太宰からお前には深刻癖がある、と言われたのは、こんな連想をする私の性癖をいったのだろう。)

御坂峠と手紙の往復をしていて、あるとき『思ひ出』の中の「私が三年生になつて、春のあるあさ——」の一節を毛筆の細かい楷書で和紙に書写して送った。「あれはよいことだ」と彼は言った。予期せぬことが彼を大変喜ばせた。

当時A氏の『Y』という長篇小説が評判で、私は太宰に会ったとき『Y』のことを話題にし